

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	一分間スピーチにあらわれた話型の発達
Author(s)	小泉, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 10 : 20 - 24
Issue Date	1980-05-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045112
Right	
Relation	



音声言語教育の方法的研究(2)

一分間スピーチにあらわれた

話型の発達

小泉節子

1. 目的

子どもの話を聞いていると、大人のように自然にすら話せない。つい構えてしまう。幼い子が何かを伝達に来る場合、肩に力が入り、思うことの半分も言えず、その内容を伝えきれないとき、大粒の涙を落していることがよくある。これは、子どもが人に話をするとき、どの意識(構えをとって)で話をしたらよいか、まだつかめないからだろう。しかし、成長とともに、子どもたちは、徐々に人前でも堂々と

話ができるようになる。これは単に話すことに慣れていく。ということではなく、その子自身が話す意識をどこかで習得してきているからだと思う。この習得過程に発達があるように思える。電車に乗っていて、見ず知らずの子どもでも、その子の年齢がだいたい見当

がつくのは、これはその子のしぐさにも関係があるが、話しぶりや話し方に、その学年をききつけているのだと思う。今回の一分間スピーチは、子どもたちの話をするときの意識集中がどのあ

たりにとまっているのかもっと平たくいうと、言いたいことを、柔軟に言えなくしてしまっている意識のこだわりについて、その年令的段階や過程を見届けるために調査を試みてみた。

2. 方法

一分間前後、自分の話したいことを、クラスの全生徒の前で話す。(事前に話したいことは考えてきて良いが、メモは見ないで話す)

3. 調査対象

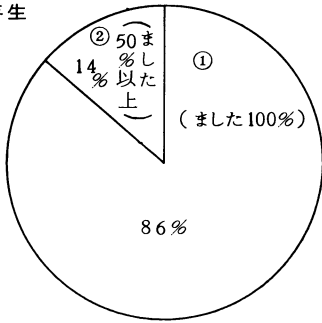
四年生 東京・八王子市立横山小学校 30名
五年生 東京・町田市立成瀬台小学校 30名
六年生 東京・町田市立南第四小学校 30名
へ各校とも、男子15名・女子15名を調査の対象とした)

4. 調査期間

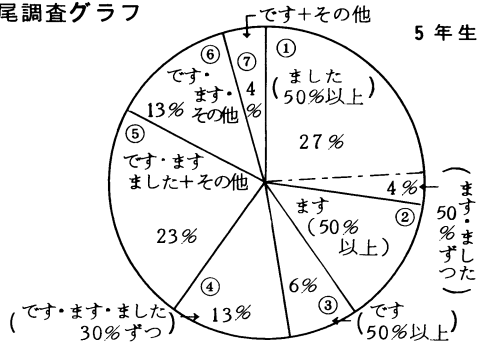
昭和五十四年五月～七月(全員テーパーレコーダーに吹き込んだものを、再生しながら、調査結果をまとめた)

表 1 A 学年別 語尾調査グラフ

4 年生



5 年生



6 年生

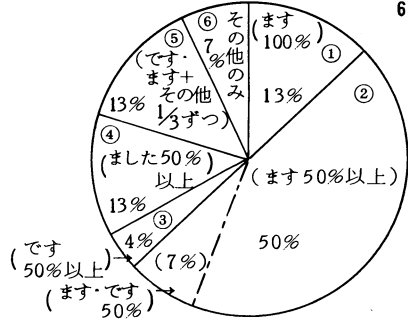


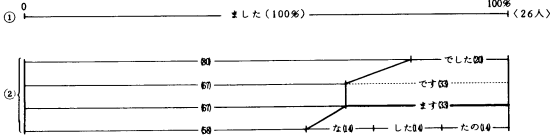
表 1 B 語尾調査内わけ使われ方の種類別グラフ

①～⑦までの番号は表 1 A の円グラフの内わけという意味

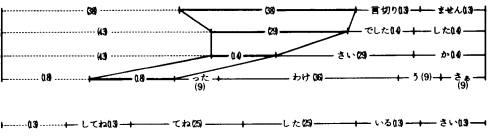
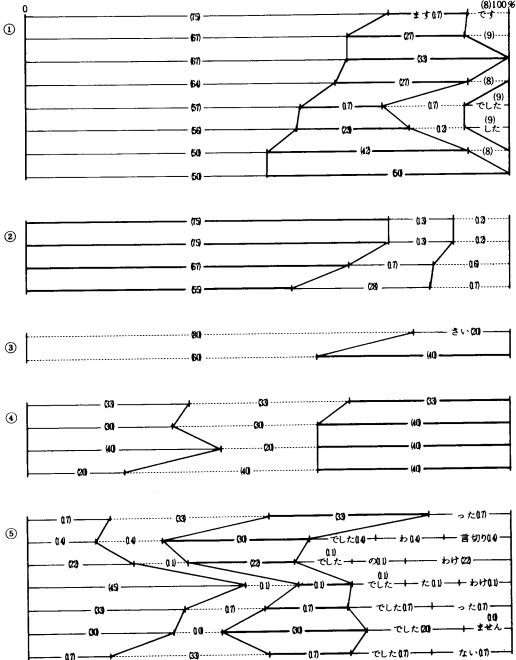
——— ました
 —— ます
 - - - - - です

() 内%
 < > 内は、そのグラフと同じ語尾使いをした子どもの人数
 書いていない場合は 1 名

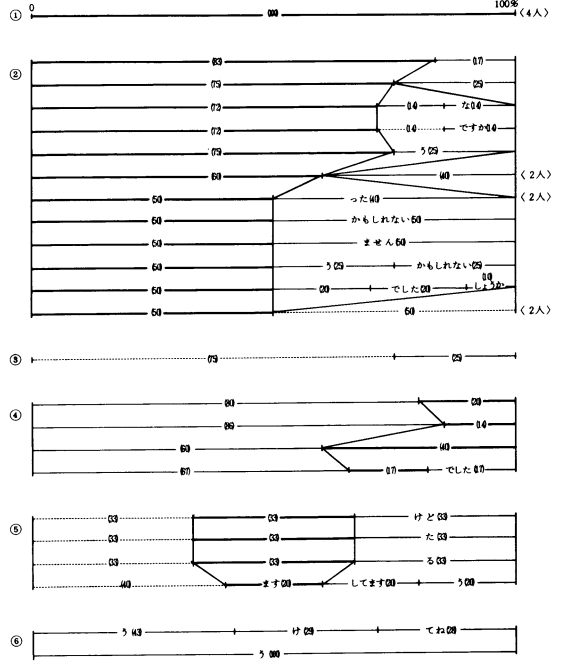
(4 年生)



(5 年生)



(6 年生)



注) グラフの集計結果が 100% を前後するのは、四捨五入したためである。

1. 語尾調査

話しぶりを見るのに一番適切なものは、その話の終りの部分をどういふことばで結んでいるかである。そこで、子どもたち一人ずつについて、スピーチ内のひとつのセンテンスごとの語尾を調査してみた。子どもたちそれぞれが、どんな割合で、語尾を使っているかを調べ、その割合が似かよったもの同志(たとえば50%以上)を使ったを使っている)を集めそれが、その学年全体の何%をしめているかを、出した結果が、表1Aの円グラフである。また表1Aの内わけ(円グラフでは番号で示されている)を行ったのが、表1Bである。この結果から考えると、四年生は、ほとんどの子どもが、話をするとき、「……しました。」という形をとっていることが、わかる。これは、話しをするということが、あつたことの報告をしなければならぬと、どこかで思っているからではないかと考えるところが、五年生になると、その「ました」がぐっと減り、です・ます体が、大変ふえてくる。そしていろいろな語尾を使い出し、四・五・六年を通じて、一人が平均して使う語尾の種類が一番多くなる。(1.2語へ4年)↓3.7語へ5年)↓1.6語へ6年)中でも一番多いのは、ました・です・ますを三語とも語

尾に使っている子どもが目立つ。もう少し細かく見ていくと、語が多い順がました↓ます↓ですと並ぶ。さらに、その他の語を見ていくと、その他の語がふえてくると「ました」の語が減ってくる傾向が見られる。(内わけ表1B 5年生⑤を参照)そして、内わけ⑥に至ると、「ました」が消え、完全にです・ます調へと変化していくのが、よくわかる。これは四年生の口を開くとすぐ報告型になるタイプと異なり、報告の内容を自分のことばで説明しようという話し方が、ふえてくるからではないか。そのひとつの特徴として、その他の話の中に、「でした」を使う子が多くなってきている。これも、「ました」という行動報告型から、こういうこと「でした」という、自分が介在した説明型ともいえる良い例の様に思える。

六年生になると、五年生で散らばっていた語尾が集まり、使い方が固定してくる。圧倒的に多いのが、「ます」で、半分以上の子どもたちが、「ます」を、必ず使っている。「ました」「です」はまだ使われているが、五年生のそれに比べると急激に減っている。「ます」が増えてきているという事は、自分自身が主体となって、話をしはじめたからだと、考えられる。六年生の語尾の特徴は次に、五年生と比べた語

について、もう少し述べたいと思う。○その他の語(です・ます・ました以外の語)の語尾について
五年生の特徴語尾
1. ……下さい。
2. ……てね。……してね。
3. ……わけ。
4. ……か。
六年生の特徴語尾
1. かもしれない。
2. ……けど。
3. ……う。
4. ……る。
五年生の語と六年生の語を比べると、はっきりわかるが、六年生は、五年生の「念を押しながら、感情に訴えていく話し方に反して、自分の考えを、自問自答する形、あるいは、考えを述べる形、あるいは言い切る形と、ずいぶん理性的な面が見られるようになってきていると、いえるのではないだろうか。

2. 文と文をつなぐ接続詞

センテンスとセンテンスのつなぎの接続詞はどうだろうか。表2は、接続詞の使われ方のグラフである。四年↓五年↓六年と、その使われる割合が少なくなっている。これは、文の長さとの関連性が多分にある。四年生は、ほとんどのセンテンスが切れずに長く続き、

それを、「それで」で結び、次へと移っている。そこで、全体の割合からいうと、多く使われる結果となるのである。接続詞が、五年生から六年生へと、使われる回数が少なくなることばは、話のセンテンスの長さだけでなく、話の内容の展開の仕方にも、及ぶように思う。接続詞で、だからと続けず、転換が良く、きびきびと話すようになるといえる。接続詞の中身だが、四年生は圧倒的に、「それで、それで」が多く、ほとんどが、時間の経過をとらえる順接ばかりである。わずかに「でも」が、顔を覗かせている程度である。五年生になると、でもが少量だが、ふえる。しかし、接続に関する内容的には、わずかに「すると」という言いまわしが五年生かなと、思えるぐらいで、四年生と、ほとんど、変わりが無い。だが、六年生になると、「だけど」「でも」「けれども」と、ことばのつなぎ方に、逆接的な要素が、色濃く入る。ことばを発しながら単に報告で終ってしまう四年生との大きな開きである。さらに、この接続の仕方、ことばのフレーズごとを追ひ、話している最中のことばとことばの接続へと、巾を広げて、考えて、いきいたいと思う。そして、その各学年の、およその話型が、考えられればと思う。

この型は、だらだらと話を、ひきずる話し方で、事実や、あったことの報告には、適している。

- ② ていからい
たらしてい

この型は、やっと自分の話に対し、もうひとつの立場から、説明しようとする態度が出てきている。だが、「が」・「でも」・「だけど」の多が全体の「て」等にくらべ、極端に少ない。わずかに、4%のみ、てが入らないが、それとて、「ので」の多が、「て」の多を充分に補うに足りているので、4年生の新しい傾向とは、いえないように思う。

○ 五年生の話型

- ていけどい
① いけれどもい

大きく目立つのは、「けど」・「だけれども」・「けれども」である。しかし、さきさん、てしてと続けた後の「けれども」・「やけど」が多い。いろいろ、順番に説明して、それでも、尚、説明不足を補う形で、話しているように思える。次の話型などは、それが、さらに強調されたといっべきだろう。

- ② いけれどもい
いけれどもい
たりししながら極めてわ

ずかではあるが登場してきている。そして、並立にものをならべたてていって、今までの説明を補う形をとっている。ここでもう一度語尾にかえるが、五年生の語尾に少量ではあるが、いそうなんです。

いというようなことです。

いというのが見られ、これらの語尾の前には、必ずといっべきよい程、「けれども」ということばが入っている。これは、予想に対しての自分の意見というよりは、むしろ一般的にこうだという見方を意識し始めているように思う。五年生は、これから考えて、一般論ふうに、話をしたりする段階に立ち到り、そういう言い方を得意がっているのかも知れない。

○ 六年生の話型

- いけれどもい
① いけれどもい
いけれどもい

この話型が一番多く出ている。六年生の特徴の一つに、接続助詞以外、係助詞を使った話型が、ずいぶんたくさん出てくる。その一部をあげると、いとかいとかいとかいとかい

- ② いよりいよりい
いよりいよりい

い

い

い、五年生でも二名位使っていたが、その他は全部六年生で初めて出てくることばばかりである。自問自答しながら、話をしはじめている学年が、六年生段階といえるのではないだろうか。それは次の語尾を見ても明瞭に言えると思う。

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

あとがき

いままです種々な調査を本誌は試みて来たが、正直に言って、これほど胸打たれた結果を得たのはめづらしい。それは、話す形式の転換と断層に、子どもたちの苦渋に満ちた意識の成長のあとを思うからである。しらずしらずに成長するというものは全く当らない。意識をこぼす(話型)のレールの上に乗せるといえるのは、至難の業なかもしれない。子どもたちは意識を自由自在に展開させるほど、レールを持っていない。こどもたちがことばを獲得しようとする動機は、教えられるからというより、その意識の高まりによって、どこかに突破口を探がし出すことによるのだと上原教授から聞かされてきたが、改めて、その感を深くした。このことは、話すことが、文章を書く以上に、ただいまの意識の在り方を伝えて来るものだけに、学校国語の現場での重要な対象として、何をいっても、早々と対策が討議されねばならないことであろう。

(東京・成瀬台小・教諭)